様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　25 年　5 月　10 日現在

機関番号：15301
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2012
課題番号：22520824
研究課題名（和文）
周縁化する島嶼社会を支える「島での生活」の意味と価値
研究課題名（英文）The meanings and values of “the life in the island” which support the marginalized island societies

研究代表者
北村　光二　（KITAMURA　KOJI）
岡山大学・大学院社会文化科学研究科・教授
研究者番号：20161490

研究成果の概要（和文）：
ごく限定的な資源利用にとどまらざるをえないという条件を抱える島嶼社会において「島での生活」が今後も維持されるためには、環境との持続可能な関係の形成と、島社会の存続を危うくする困難と向き合う人々のまとまりが決定的に重要だと考えられた。そして、環境との持続可能な関係を担う当事者たちそれぞれの自律的な活動と相互の対等な関わりこそが直面する困難の克服を可能にする人々のまとまりを生み出すことになるのだと考えられた。

研究成果の概要（英文）：
In this study, we have clarified that the formation of sustainable relationship with natural environment and the formation of equal relationship with each other islanders who autonomously live in their environment are decisively important for the sake of coping with the difficulties endangering the continuation of the island societies. The sustainable relationship with natural environment can be maintained by the participants who interact with the same environment and share the same form of relationship with their environment.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	1,500,000	450,000	1,950,000
２０１１年度	1,300,000	390,000	1,690,000
２０１２年度	600,000	180,000	780,000
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文化人類学・「文化人類学・民俗学」
キーワード：ミクロネシア連邦、ヤップ島、瀬戸内海、島嶼社会、持続可能性、意味と価値、当事者性、本土

１．研究開始当初の背景
（１）申請者は、以前より行ってきた東アフリカ牧畜民の生態人類学的研究において、乾燥地帯の不確実性がきわめて高い自然環境の中で、工夫を凝らして何とか生活を維持している生き方に注目してきたが、その後の瀬戸内海やオセアニアの調査から、島嶼社会が同様の不確実性の高い自然環境に直接向き合ってそれと折り合いをつけるという生活文化を保持していることが明らかになった。
（２）近年、地球温暖化とそれにともなう

大規模な気候変動こそが人類が取り組むべき最も重要な課題と考えられるようになり、それに対応して、「地域に根差した脱温暖化」という観点から、地域の視点や生活者の視点を基本として、持続可能な社会のありようを考えようとする試みが注目されるようになった。地域にある資源を活用しつつ継承されてきた生活実践を緻密に跡づけることで持続可能な地域社会のあり方を具体的に検討するという研究を志向するうえで、島嶼社会の研究が不可欠であると考えた。

２．研究の目的

本研究の目的は、周囲の自然環境にある資源に強く依存した生活について、さまざまな島嶼社会のさまざまな地域（瀬戸内海島嶼部、琉球列島、ミクロネシア）における具体的実践を、地域ごとの多様性と歴史的変遷を含めて明らかにすることにある。

その中で、本研究においてとくに強調点を置くものは、自然からもたらされるマイナスの影響や、プラスのものを含む影響の不確実性に対して、それらを受動的に受けとめることをあらかじめの前提とした生活実践を考えることである。自然からもたらされるそれらの影響への予防的対応というレベルで、自然との関係における「心構え」や「作法」を意識するというやり方が想定できるが、当該地域において、その種の対応としてどのような項目が意識されていて、それらが具体的実践にどう反映しているのかを明らかにする。

このような対応は、同じ環境と向かい合っている同じ地域の人びとが共同で保持する「ものの見方」や「やり方」になっていなければならない。そして、そのような自然との関係においては、それによってどんな現実的な結果が実現できるかという側面だけが問題になるのではなく、それがどんな体験をもたらすのかという側面、すなわち、そのような活動の「意味や価値」という側面が重要になるのだと考えられる。

物質的にはごく限定的な範囲の資源利用にとどまらざるをえない島嶼社会における生活が今後も維持されるものになるためには、その生活に、人びとが共有するはずの「意味と価値」が見出されなければならないと考えられるのである。

３．研究の方法

以下の項目についての現地調査を、岡山県笠岡市白石島、鹿児島県与論島、パラオ共和国バベルダオブ島とミクロネシア連邦ヤップ島において行い、それについての比較にもとづいて類型化して理解することを目指す。

（１）徹底的に周縁化された「島での生活」の維持という観点から、それぞれの調査対象地域ごとに、「世代を超えて継承されてきた生活実践」に関する全体像を把握する。

①社会・経済的な領域における周縁化をもたらす構造的前提の把握

②生業構造の歴史的変遷に関わる事実の集積

③社会組織のあり方と生業活動の現状の把握

（２）「持続可能な地域社会」において営まれるべき生活を考えるという観点から、「島での生活」に見出される「人間の側の受動性を前提とする生活実践」の具体例を把握する

①生業活動における「心構え」や「作法」として意識されていること

②自然や「神」への信仰心やそれを背景とした「禁忌」への随順や「儀礼」の遂行

③自然環境を含めた外部世界との関係における「体験の受動性」を前提とした集団的意思決定過程

４．研究成果

本研究では、徹底的に周縁化された「島での生活」が今後も維持されるために不可欠な条件を、「持続可能な地域社会のあり方」という観点から理解しようとして、第１に、「世代を超えて継承されてきた生活実践」の把握を目指し、第 2 に、「外部世界からの影響や介入への対応」における現状と課題を明らかにしようとした。

以下では、この問題についてどのような成果が得られたかを、現地調査の労力を集中させたミクロネシア連邦ヤップ島の事例を中心に述べる。

（１）世代を超えて継承されてきた生活実践：それらの多くは、後に述べるようなヨーロッパ近代との出会いを経て大きな変容を蒙りつつも、現在もその重要性は失われることなく存続していると考えられた。

①伝統的な食糧生産活動について、植物性食品の栽培と漁撈活動、食生活の実態という側面から現状を詳細に記述した。

②伝統的な社会編成の保持について、土地所有制度や政治の基本単位としての「村」のあり方、「村」間の階層構造とそれらを統合するものとしての「首長制」と呼ばれる政治体制のそれぞれについて、歴史的変遷と現状について記述した。

（２）人間の側の受動性を前提とする生活実践：自然環境との関係においては、目先の成果に拘泥せずに自分たちのやり方を大切にしようとし、人々相互の関係においては、そのときその場での決着を求めず、より長い時間にわたって維持される関係の維持に重心を置いたやり方になっている。

①ヤップの人々は自らの食料生産活動を、よ

り多くのより質の良い、ないしは、より高く売れるものの生産を志向する活動だとは考えておらず、より良質のものの生産のために工夫をしたり、高い現金収入のために新しい作物の栽培を行ったりすることに対して、明白な忌避意識を抱いていることが明らかになった。
②ヤップ島においては、主食となるイモや漁獲物など自らの労働が生み出す物品の売買がほとんど行われていないが、それらは、現在でも、贈り物の形で人々の間でやり取りされている。
（３）外部世界からの影響への対応と文化変容：ヤップ社会における 19 世紀以降のヨーロッパ近代（スペイン、ドイツ、日本、アメリカ）との出会いは、過剰に抑圧的なものではなく、伝統的なものが極端な変形を蒙ることなく残されたと考えられるが、その影響は大きく深い。
①第 2 次大戦後のヤップ社会は、アメリカからの巨額の援助を背景に、賃金労働が人々の生計維持の基盤になるというところまで変化し、現金経済化が浸透して、生活全体のアメリカ化・近代化が進行している。
②ヤップ島においては、本島内の階層構造や本島と周辺離島の間の支配／従属関係などを背景とする伝統的政治体制がいまだに一定の機能を果たしているが、その一方で、この体制は、これらの外部から及ぼされる、グローバルな競争世界へと引きずり込もうとする力に対しては、全く無力な状態にあることが明らかである。
（４）外部世界からの破壊的介入への対抗：最終年度のヤップ島での現地調査において、中国企業による大規模リゾート開発計画が発表されたが、州政府がそれに承認を与えたのに対して多くの住民から反対の立場の表明があった。
①島という場所は、規模が小さく多様性が貧弱であることから、無思慮な働きかけによって取り返しのつかないダメージを被る可能性が高く、周囲の環境との持続可能な共存関係を築くことが不可欠だと考えられるが、今回の開発計画に対して、環境との関係のあり方を選択する当事者である島に暮らす人々は、それが破壊的なものであると判断した。
②この反対の立場の選択は、伝統的な共同体組織や政治体制の意思決定過程が機能して可能になったのではなく、島社会の存続を危うくするような困難を乗り越えようとして、「同じ島に暮らす人間どうし」という、自律的な個人相互の対等な関わりに目が向けられ、そのような仲間との共同を予想したものとしてもたらされたと考えられた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　２件）
①藤井和佐、地域の意思決定の場への参画 - 長野県における女性農業委員の活動から、日本村落研究学会企画、原珠理・大内雅利編『【年報】村落研究 48　農村社会を組みかえる女性たち：ジェンダー関係の変革に向けて』農山漁村文化協会、査読有、48、2012，69－106.
②北村光二、決定不可能な循環的回路を前提とした自己言及的活動、『人間文化（神戸学院大学人文学会）』、査読無、27、2010、16－21.

〔学会発表〕（計　１件）
北村光二、島で暮らすということ：場所にこだわる生き方の典型として、岡山大学人文学フロンティア 2012：シンポジウム「島に生きる　島を想う」、2013 年 1 月 13 日、岡山大学 50 周年記念館。

〔図書〕（計　２件）
①北村光二、京都大学学術出版会、制度以前と以後を繋ぐものと隔てるもの（河合香吏編）『制度：人類社会の進化』、2013、420（239－263）。
②Koji Kitamura, Kyoto University Press, From whence comes human sociality?: Recursive decision-making processes in the group phenomenon and classification of others through representation.　In: Kaori Kawai (ed.) Groups: The evolution of human sociality. 2013, pp. 413 (pp. 59-77).

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
北村　光二（KITAMURA KOJI）
岡山大学・大学院社会文化科学研究科・教授
研究者番号：20161490

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
藤井　和佐（FUJII WASA）
岡山大学・大学院社会文化科学研究科・教授
研究者番号：90324954